

諸生に示す (安積良齋)

戒君勿見墨陀花 花下美人花遜華
戒君勿見墨陀月 月下少婦月恥潔
先哲惜陰勤精研 何暇花月耽流連
吾閱書生三十年 志業多因花月捐

君を 戒む 見る 勿れ 墨陀の 花

花下の 美人に 花も 華を 遜る

君を 戒む 見る 勿れ 墨陀の 月

月下の 少婦に 月も 潔を 恥ず

先哲 陰を 惜しみ 勤めて 精研す

何の 暇 あつてか 花月 流連に 耽らん

吾 書生を 閱する 三十年

志業 多くは 花月に 因つて 捐つ

解説 門人の遊惰に耽るのあまり、学業を廢することのなきよう戒めた詩。

語釈 ※示||教えを示すの意。 ※諸生||学生。 ※戒君||君を戒める。 花見に浮かれる気持ちを引締める。 ※勿見||見てはいけない。 ※墨陀花||隅田川堤の花。 ※遜華||遜は謙遜。 華は花の美しさ。 美人に花も顔負けの意。 ※少婦||年若い女性。
※潔||潔朗・潔清・潔静などの意。 容姿が秀れていて、美しく品があることを意味する。
※先哲||前代の哲人。 ※惜陰||わずかな時間も惜しむ。 ※精研||細大もらさず深く研究する。 ※花月||度を過ぎた風流事。 ※流連||流連荒亡の略。 遊興にふけて家に帰るのを忘れること。 ※閱||観に同じ。 観察。 ※志業||大志と学業。 大志をもつて学業に志すこと。 ※因花月捐||色におぼれて志を失い、学問も捨てたの意。

通釈 学生諸君。 諸君に告げておく。 諸君は勉学中であり、修業中の身である。 墨田川のほとりで花見などに浮かれてはならない。 あの近辺は、桜の花もその美しさには恥じらうほどの美人が徘徊して、酔歩の袖をひき、諸君をとりこにする。 墨田川のほとりで月見などに浮かれてもならない。 光の下に、月も恥じらう妙齡の女性がいて、諸君を誘惑するに違いないからだ。 いったい諸君は何のために笈を負い、故郷をあとにしたのか。 学業を成就せんがためではなかったか。 そうした女性は諸君の固い決意も、直ぐと鈍らせ、蕩かしてしまふものなのだ。 古の先哲・賢哲は、ちよつとの時間も惜しんで勉学に励んだものである。 ましてや、諸君は修業中の身である。 どうして花見や月見にうつつをぬかし、色香に耽る暇などがあるうか。 一日たりともないはずである。 私は諸君のような青襟の学生を三十年も見てきているが、せつかくの大志も学業も、多くの場合、女性の色香によって、これを捨ててしまうことが多い。 くれぐれも心してほしいものである。